

実存範疇としての「戯作的」—ある二葉亭四迷論—

浜 下 昌 宏

Summary

Light Literature-like Existence of Futabatei Shimei

HAMASHITA Masahiro

Futabatei Shimei contributed much to modern Japanese literature as a distinguished novelist who made way for a new style that unified spoken and written languages ("gen-bun icchi tai") in the Meiji era. His usages of words were so innovative that they suggested the style of light literature ("gesaku") in the Edo period. His professional career and personality are equally interesting in that he does not seem to have adjusted himself to the fashionable behavioral pattern of his time unlike most of his contemporary intellectual up-risers. It would be difficult and meaningless to ascertain the relationship between the style of writing and the personality, even though I appreciate the insightful remark by Buffon: "Le style est l'homme même." However, it cannot be denied that his "gesaku"-like style in writing corresponds to his way of life (light-minded and self-caricaturizing style of thought and life) in one way or another. By "gesaku" I mean an attitude of self-consciousness with which to seek an appropriate self in the turmoil of the overwhelming power or change of environment that possibly leads one to the corruption of morality and the collapse of self-identity. In spite of the successful publication, Shimei never had a high opinion of his *Ukigumo*, and in fact he attached less importance to the social status of literature. Instead he would rather prefer business activities or political actions with both a mind of patriotic nationalist and that of vagabond adventurer, though his effort eventually failed by his death. Agony of dilemma in his mind constituted his existence reflecting a spirit of "gesaku."

<序>近代の文体と近代人：二葉亭四迷への視点

明治維新は日本史上において未曾有の激動の時代を画した。激動は人のうえに降りかかる災厄であり、試練である。驚天動地的な自然災害であれば、変る風景にいずれ順応すればよいが、明治維新は精神的な意味においてこそ天地が逆転するような変動であり、それゆえに人の実存が脅かされ、言語表現では文体の変容を余儀なくされたのであった。そうした時代の人物とその生き方の範例として、二葉亭四迷を改めて考えてみたい。幕末の元治元年（1864）に生れ明治42年（1909）に死んだ四迷は、人生と教養の成長を明治の維新时期・開化期に重ねている。

まず、テキストから検討するとして、彼の代表作『浮雲』を開いてみよう。その文体は衝撃的である。アルパカ帽をかぶって鋭い眼が金縁眼鏡の奥から睨んでいるという二葉亭四迷の残された写真からは、ロシア文学者としての颯爽とした風貌しか思い浮かばないのであるが、ひとたび『浮雲』を読もうとすると、冒頭から文章・文体の意外さに拍子抜けというよりも愕然とする。

「第一編 第一回 ア、ラ怪^{あや}しの人の挙^{ふるまひ}動」の出だしは以下の通りである。

「千早振る神無^{かみなづき}月も最早^{もはや}跡二日の余波となつた廿八日の午後三時頃に、神田見附^{かんだみつけ}の内より、塗渡^{とわた}る蟻、散る蜘蛛^{くも}の子とうようよぞよ沸出^{わきい}で、来るのは、孰^{いづ}れも顎^{おとがひ}を気にし給ふ方々。しかし熟々^{つらつら}見て篤^{とく}と点検すると、是れにも種々^{さまざま}種類のあるもので、まづ髭^{ひげ}から書立てれば、口髭、頬髭^{ほうひげ}、顎^{あご}の髭、暴^{ひげ}に興起した拿破崙^{やげ}髭に、狎^{おや}の口めいた比斯馬克^{なぽれをん}髭、ちん、びすまるく、そのほか矮鷄^{ちやば}髭、貉^{むじな}髭、ありやなしやの幻の髭と、濃^{うす}くも淡^{はえわか}くもいろいろに生分る」(全集1、4)。

いったいこの文章は明治を代表する欧化知識人・文人のものなのか？ 同時代人の反応も強烈であった。森鷗外は言う、「浮雲には僕も驚かされた。小説の筆が心理的方面に動き出したのは、日本ではあれが始であらう。あの時代にあんなものを書いたのには驚かざることを得ない。あの時代だから驚く」(「長谷川辰之助」)(鷗外、344)。

『浮雲』の文体から連想するのは、たとえば次のような調子の作品であろう。

「金兵衛家督をつぎてより、なに不足もなければ、だんだんおごり長じ、日夜酒宴をのみ事となし、むかしの姿は引かえて、いまはあたかも中剃りを髻のあたりまでそり、かみの毛をばねずみの尻尾くらいにして本多に結い、きものは黒羽二重ずくめ、帯はびろうどまたは博多織、風通もうるなどと出かけ、あらゆる当世のしゃれをつくせば、・・・」(『江戸の戯作絵本(1) 初期黄表紙集』、18)「金々先生の出たち、八丈八端の羽織、縞ちりめんの小袖、役者染の下着、亀屋頭巾に目ばかりいだし、人目をすこし忍びけり。」(同上、20)——これは安永4年(1775)刊の恋川春町作『金々先生栄花夢』の一節である。たしかに、描写されている場面は、上記『浮雲』では明治の成り上がりの西洋かぶれのハイカラ気取り、ここで引用した江戸中期の戯作では、やはり成り上がりの遊び人の伊達男ぶりである。それにしても文体の戯作調は時代差を感じさせない。

さて、テキストから目を離し、次に人間的要素について考えてみよう。四迷については後に詳論するとして、次に引用するケーベルの評言は興味深い。漢学者と洋学者とを比較して、ケーベルの見た日本近代の知識人の姿である。

明治26年に当時札幌農学校と並んで唯一の高等教育機関であった東京の帝国大学文科大学に雇われ教師 (the Yatoi) として招かれ、西洋古典やドイツ哲学についてヨーロッパ文化の精華を若い日本人に対して、人格的感化を与えつつ熱心に教えたケーベルは、だからといって洋学の知識と欧語能力を誇示する、知的成り上がりともいえる俊才たちを無条件に誉めたわけではなかった。むしろ、その慢心による夜郎自大的態度を嫌悪していた。

「日本人の精神ならびに性格を甚だしく醜くするところの傷所は——遺憾ながら私はこの場合私の学生を全く除外するわけに行かない——虚栄心と、自己認識の欠乏と、および批評能力の更にそれ以上に欠如せることである。これらの悪性の精神的ならびに道義的欠点は、西洋の学術や芸術の杯から少しばかり啜ったような日本人においてとくに目立ってまた滑稽な風に現れる、従って主として「学者」と言われ、「指導者」と呼ばれる人たちにおいて認められるのである。」(ケーベル、87)

「この声高き、自負する、外に向える、匆忙なる、品位なき、欺瞞的な、群衆の間および国外において認められんとして媚を呈する日本人。——今日の日本の或る方面の大なる欠陥を表示するこの特質は、少し古い時代の日本人、とくにその時代の学者や、教育者やまた教授たち (私の就職の初年 [1893] に親しく相識るの機会をえたところの) 単純な、謙虚な、落着きのある、物静かな、思慮ある、高貴な性質に比していかに著しい対照をなすことであろう！」(ケーベル、93)

——「声高き、自負する、外に向える、匆忙なる、品位なき、欺瞞的な、群衆の間および国外において認められんとして媚を呈する日本人」とは、具体的には当時の思想界の寵児、井上哲次郎が(村山、32)、そしてそれと対比される、「単純な、謙虚な、落着きのある、物静かな、思慮ある、高貴な性質」の持ち主は、ケーベル自身名前を挙げている根本通明や浜尾新などである (ケーベル、93)。ケーベルによる厳しい指弾は現代でもまだ、というより、いっそう当てはまる。つまり日本人の「人格」「品性」の問題である。東洋に依拠してきた伝統を一挙に方向転換して異質の文明的要素をやっきになって吸収したこと、おそらくその転向やその後の勤勉振りには問題なく、むしろ賞賛に値するとしても、そうしたいびつな精神を形成するあまり、自覚や批判精神を欠落させてしまうことになる滑稽さ、そしてそれが品性無き人格に反映しているということ、ケーベルはそのことを衝いている。

本稿は二葉亭四迷をめぐる試論である。私は彼の文体への関心と、彼の人物像への興味とからこの試論を思い立った。文体と人物と、両者の直接的連関は論証できないとしても、戯作的文章の奥に、彼の人生観や人物像が見えてこないだろうか。精神や思想が文体に如実に現れるとは限らないが、ある程度は人格の表現でもあろう。

< 1 > 文：小説・文体の近代化と言文一致運動

二葉亭四迷は山田美妙と並んで、近代小説の言文一致文体の創始者とされている。そこに至るまでには、「小説」、「国語」、「文体」をめぐる近代の言語表現上の問題が含まれている。

明治の文学はまず政治小説から注目される（明治16年：矢野文雄『経国美談』、17年：藤田茂吉『文明東漸史』、18-24年：柴四郎『佳人の奇遇』、19年：末広鉄腸『二十三年未来記』ほか）。しかし新文学を目指す流れは、文学意識・文学理論の誕生を促す。代表的な現れは第1に明治15年の『新体詩抄』に結実する新体詩運動、第2に『小説神髓』を先駆とする小説論および小説の実作、そして第3に言文一致運動に特色が求められるだろう（片岡、26）。小説以前には、幕末以来の戯作文（仮名垣魯文ほか）、実録物（松村春輔ほか）、評論文（成島柳北・福地桜痴ほか）が盛んであった。そして西欧の文物輸入の狂奔の風潮に合わせて翻訳・翻案物が続々と出版されていた。当初は文法的にも内容的にも原書に忠実とはとても言い難いシロモノの氾濫であったが、明治18年、イギリスの政治小説家リットンの *Kenelm Chillingly* の翻訳『繫思談』（藤田鳴鶴纂評、尾崎庸夫訳）がそれまでの翻訳態度を根本的に改めさせる厳正な翻訳の最初の業績となった（安藤、152-3）。それと並んで明治の翻訳の一大転機に貢献したのが、明治21年の二葉亭四迷訳『あひびき』（ツルゲーネフ原作）と明治22年の益田克徳訳『夜と朝』（リットン原作）であるが、その理由はこれら二つが口語訳を試みたことにある（安藤、153）。翻訳物の刺激を受けて、明治18-9年の坪内逍遙『小説神髓』、そして明治19年の二葉亭四迷「小説総論」による<小説>定義の試みを介して、小説の隆盛をみるのが明治20年代である。そしてその時代はまた、国語・国字問題を論争的・政策的に展開しながら言文一致運動の時代でもあった。

時代の変化を文化変革の好機と捉えた明治知識人の意欲には感服することが多々ある。新体詩の試みもその一環である。明治15年に刊行された『新体詩抄』に関わる3名の学者は、興味深いことにいずれも洋学に長けた人たちであって国学者・歌人・俳人のたぐいは一人もいない。それだけに、おそらく進取の気運を存分に発揮したのであろう。同書において井上哲次郎は「夫レ明治ノ歌ハ、明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ」という気概を述べている。矢田部良吉は“脱亜入欧”の国策を文化的に受けるかのように、「我邦人ノ従来平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少ナキヲ嘆シ西洋ノ風ニ模倣シテ一種新体ノ詩ヲ作り出セリ」と言い、さらに外山正一は、人は雅語や漢語を使って詩操を発揮するが我々は「新古雅俗の区別なく、和漢西洋ごちやまぜて、人に分かるが専一と」気軽に書くのだから、「見識高き人たちは、をかしなものと笑はば笑へ」と自信を見せる。文章表現の改革の意識は、時代の意識の反映でもあった。新体詩運動の場合、強烈な近代人・同時代の意識を示している。

近代語が次第に新しい語彙と語法を整備していく中で（森岡 a；森岡 b）、言文一致運動も近代国語変革の大きな動きであった。もとより、言文一致あるいは口語体的文体への志向は明治以降に初めて興ったわけではない。古くは『梁塵秘抄』があり、また黄表紙の会話部分など

はすでに口語体である。しかし、明治期では国家政策としての近代国民教育の一環として識字率の向上や啓蒙が追い風となった。また、近代国民国家を支えるイデオロギー的必須項目として<国語>の創出が急務となり文典の整備を初めとする国語学者の社会的活躍も見ることとなり（山東）、いずれは日本近代の台湾・朝鮮・満州・大東亜共栄圏の植民地主義とも関わる国語意識が政策的課題となっていく（イ・ヨンスク）。この潮流の中で言文一致の動きは、西欧文学の翻訳という欧化の一環として、西洋近代語と同じく話し言葉と書き言葉の文法的・表記的一致を日本語に求めるようになる。さらに坪内逍遙を先駆とする新しい「小説」概念の提示とその方向としてのリアリズム志向、等々の展開の中で、文学・国語・国民教育・啓蒙という要素の絡み合いの中で運動として展開していくのである。二葉亭四迷の文壇への登場はそのような時代背景においてであった。彼の位置を知るために、明治期の言文一致の流れをかんたんに年を追ってみておこう（詳細な年表は、山本、775-813、を参照せよ）。その流れは幕末から始まっている。

1866（慶応2）：前島密（1835-1919）、徳川慶喜に「漢字御廃止之議」を建白。

1872（M5）：森有礼（1847-1889）[アメリカ駐在代理公使]、日本語廃止論を唱えるが、ホイットニー（イエール大学教授）にたしなめられる。翌1873、ロンドン滞在中の馬場辰猪（1850-1888）は『日本語文典初歩』を公刊して日本語は文法法則のある立派な言語であることを立証。

1883（M16）：三宅米吉「かなのくわい」結成。

1885（M18）：田口卯吉・チェンバレン「羅馬字会」結成。

1886（M19）：物集高見^{もずめにかみ}『言文一致』

1886：11月、山田美妙『嘲戒小説天狗』

1886：二葉亭四迷『虚無党形気』

1887（M20）：山田美妙『武蔵野』

1887-1889（M22）：二葉亭四迷『浮雲』

1888（M21）：二葉亭四迷『あひびき』

1888：3月、林甕臣「言文一致歌」

1894（M27）頃：[ドイツ留学から帰国、7月に帝國大学の博言学講座教授に就任した]上田万年^{かずとし}（1867-1937）により国語統一のための標準語制定の急務、それに関連して文芸家の努力によって洗練された言文一致の文章の出現を期待することが主張される。

1900（M33）：帝国教育会内に「言文一致会」が結成。

1901（M34）：2、3月に「言文一致の実行に就ての請願」書を貴衆両院に提出、可決。[国家として文章は言文一致の方針]

1904（M37）：第一次国定読本「口語文の具体的な例文」

1910（M43）：第二次国定読本

1916（T5）：国語調査委員会「口語法」

1917（T6）：国語調査委員会「口語法別記」

小説『浮雲』で一躍文壇の寵児に踊り出た四迷であるが、彼は文学者としての自分の企てに気負いはない。露骨に金のためにしたこと、と言ってはばからない。「余が言文一致の由来」において、坪内逍遙の勧めで円朝の落語のように書くことにしたと淡々と記している。「何か一つ書いて見たいとは思ったが、元来の文章下手で皆目方角が分らぬ。そこで坪内先生の許へ行って、何うしたらよからうかと話して見ると、君は円朝の落語を知ってゐよう、あの円朝の落語通りに書いて見たら何うかといふ」（全集5、170）、と。もっとも、円朝落語の口調の模倣ということが可能になったのは、ひとつには速記術を用いた日本最初の講談本として三遊亭円朝『怪談牡丹灯籠』の第一編が明治17年7月に公刊されていたからである。さらにまた、それに遡ること2年前の明治15年には、1837年のアイザック・プットマン考案による表音式速記術を、田鎖綱紀がそれを日本語に応用、政治演説の記録や議事録作成に応用したのであった（磯田、107）。

<2> 人：明治人・文学者・知識人としての四迷

二葉亭四迷こと長谷川辰之助は、人物としても興味深い。その熱情あふれる行動者の側面（謎めいてスパイ説までも—cf. 西木）、言文一致小説の創始者という文人的要素、そして政府と社会に対して批判しつづける革命家的性格など、複雑な要素が彼の人格と、それに半ば起因する運命的とも言える波乱多い人生を形作っている。

㊦) まず、戯号である「二葉亭四迷」という名前が興味を引く。明治の文人の多くは、もとは漢詩人・漢学者がつけた雅号を筆名としている。漱石、鷗外、露伴、紅葉、逍遙^{ほうほうさん}、北邨散士^し、等々である。明治20年代からの文学改良運動の中で、小説家たちは前時代の戯作者と違うという自負ゆえの雅号であった（十川 c、8）。それに対し例外的に、明治20年の『浮雲』で初めて使われた「二葉亭四迷」にあっては、江戸時代の戯作者である式亭三馬、柳亭種彦や、また明治期に活躍した落語家、三遊亭円朝のように、「亭」という号は戯号でしかない。自らを戯作者に準えようとする算段なのか。さらに「四迷」という、何とも曖昧模糊とした命名も自嘲的な響きがある。彼自身、「余が半生の懺悔」で金のために作品を物するという行為への自嘲的反省をしている。また、石光眞清『曠野の花』（昭和33年）のなかで、父の罵倒説が紹介されている。四迷の父は武士のはしくれであっても三文文士に自分の息子が成ることに耐えられず、勘当同様に貴様のようなヤクザ者は「クタバツテシメエ」（「シメエ」→四迷）と怒鳴ったという（石光、303）。一方、「二葉亭」の「二葉」については、彼の口語体の手本とした三遊亭円朝が明治9年から21年11月まで本所二葉町（現墨田区亀沢町あたり）に住み、「二葉町様」と呼ばれていたことから採ったのではないか、という畑有三の推測がある（畑、419ff）。また十川は、若いころからの懐疑的傾向と江戸式戯作気分とから、わざとふざけた名乗りをした（十川 c、10-11）、と解し、関は、戯作者風のペンネームは日本の庶民的な言語・文学の伝統を生かそうとして古風な戯号を採った、と理解する（関、255）。さらに意味内容としては、「若い懐疑家」であって「二葉」は幼さを、「四迷」は心が四分五裂していること。そして十返舎一

九（ $10 = 1 + 9$ ）のように「二二が四」のようにしやれたのではないか、三遊亭円朝の速記本にヒントを得て口語体小説を作ること世話になった「三遊亭」の三から一を引いて「二葉亭」と名乗ったのではないか、などと推測する（関、256）。いわれはともかく、森鷗外も書いている。「坪内雄蔵氏が春の屋おぼろで、矢崎鎮四郎氏が嵯峨の屋おむろで、長谷川辰之助氏も二葉亭四迷である。あんな月並の名を署して著述をする時であるのに、あんなものを書かれたのだ。嘘の名を著述に署することはどこの国にもある。昔もある。今もある。後世もあるだらう。併し「浮雲、二葉亭四迷作」といふ八字は珍らしい矛盾、稀なるアナクロニズムとして、永遠に文芸史上に残して置くべきものであらう」（「長谷川辰之助」）（鷗外、344-5）。

弐）出生地を確認してみよう。二葉亭四迷は元治元年（1864）2月28日に江戸の市ヶ谷合羽坂にあった尾張藩上屋敷に生れている。父（長谷川吉数）は尾張藩の下級武士であった。この上屋敷は明治維新後政府に没収され、明治5年、陸軍士官学校になる。富国強兵の国策に沿った陸軍幹部養成学校である。ちなみに四迷はこの学校に3度（1878、1879、1880）受験するが失敗し、結局、1881年に東京外国語学校ロシア語科に入学する。陸軍士官学校の大講堂はのちに第二次世界大戦後、1946年の極東国際軍事裁判（東京裁判）の舞台となり、そして陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地となって今日にいたるが、1970年に三島由紀夫と盾の会が乱入し大講堂のベランダで三島が肉声で決起を促す演説をした後に自刃したことは戦後史の忘れられない事件であった。地霊といった呪術的観念を持ち出すこともないが、四迷は出生の地からして何やら運命を背負った感がある。

江戸が東京となり、四迷は明治1年から5年までの4年間、父の先祖の地であり両親の郷里である名古屋に移り住むが、「自分は東京者」（全集5、170）と言ったり、「私は御承知の通り愛知の人間だが」（全集5、253）とも言う。『浮雲』執筆時のノートには「張州逸民長某」（尾張藩の逸民である長谷川某）とあるという（十川c、19）。四迷は生涯のほとんどを東京で暮らしながら、終生自らを「尾張の人間」と意識していたらしい。むろん、佐幕派の子弟という僻目もあろうし、薩長閥政府に対する反発もあろう。十川は「日本の中心地になっていく東京とのずれと、その反対に、尾張の人としてはどこか落ちつかない空虚な感じ」（十川c、20）があるとみなし、それは「不安定な生涯とも呼応」（十川c、20）すると捉えている。帰属が不安定な四迷の生涯は、職業を転々としたところにも現れている。彼の生涯・職歴については、詳しい研究もあるが（佐藤、11-126）、彼自らが「余の思想史」において記していることを見ておこう。

「私は文学者にならうとして修養研鑽した事は一つもない。露西亜の文学を学んだのも、語学を完全に学ぶには是非小説を読まねばならぬので、それに手をつけたのだし、浮雲を書いて以来の職業も決して文学者小説家ではなかった」、と語る四迷は、さらに、「初めは独学して得た英語で、官報局の翻訳係になった。それから陸軍大学の語学教師となり、海軍省で編輯書記となり、最後に外国語学校に露語の教師となった」（全集5、290）。その後、明治35年に国際問題への関心から満州そして蒙古に入り、北京の警務学堂にしばらく勤務、日露戦争の勃発後、

明治36年に帰国して翌年朝日新聞社に入社する。死因となる発病のあったペテルブルグへは、朝日新聞の特派員としての赴任であった。

参) 同時代の二人の文豪、夏目漱石と森鷗外による四迷評も興味深い。朝日新聞で同僚であった夏目漱石は、1909年（明治42年）、『それから』を公刊した年に、四迷を偲んで書いた「長谷川君と余」で次のように述べる。「余の受けた感じは、品位のある紳士らしい男—文学者でもない、新聞社員でもない、又政客でも軍人でもない、あらゆる職業以外に厳然として存在する一種品位のある紳士から受くる社交的の快味であった。さうして、此品位は単に門地階級から生ずる貴族的のものではない、半分は性情、半分は修養から来てゐるといふ事を悟った。しかもその修養のうちには、自制とか克己とかいふ所謂漢学者から受襲いで、強いて己れを矯めた痕跡がないといふ事を発見した。さうして其幾分は学問の結果自から此に至ったものと鑑定した。又幾分は学問と反対の方面、即ち俗に云ふ苦勞をして、野暮を洗ひ落して、さうして再び野暮に安住してゐる所から起ったものと判断した」（漱石、221）。

また鷗外も回想記を残している。「逢ひたくて逢はずにしまふ人は澤山ある」（鷗外、343）と書き出す「長谷川辰之助」のなかで、なかなか会えなかった四迷との、おそらく一度きりの出会いを次のように記している。「丸で初て逢った人のやうではない」（鷗外、347）。そしてその短文中に2度、「何を話したか」と書いている（鷗外、347、348）。記憶をたどろうとするが、正確には思い出していない。『舞姫』のロシア語訳のこと、同じく『血笑記』の訳本のこと、洋行する計画のこと、そして「此人の口からは存外文学談が出ないで、却て露西亞の国風、露西亞人の性質といふやうな話が出た」（鷗外、348）。おそらく、四迷は多弁でも、談論風発といった様子でもなかったのだろう。漱石の印象も似ている。「余を驚ろかしたのは君の音調である。白状すれば、もう少しは浮いてるだらうと思った。所が非常な呂音〔低音〕で大変落ち付いて、緩くりした、少しも逼る所のない話し方をする」（漱石、220）。

——鷗外と漱石による二葉亭四迷との対面の印象を、先に引用したケーベルによる日本人教師に対する批評と比較するとよいだろう。洋学者の夜郎自大振りと漢学者の人徳との対照がケーベルの文章には書かれていたが、四迷の場合、彼はロシア文学を学びつつ、漢学的素養を自覚していた。すでに、自分の教養における両者の共存が葛藤の要素の一つであった。そこを四迷は止揚する。

四) 同じく同時代の内田魯庵による四迷評も見てみよう。明治22年の秋の末に内田魯庵は初めて二葉亭四迷と会う。巖本撫象から四迷について「二葉亭は哲学者である、シカモ輪郭の大なる人物である」という称賛を耳にしていたが、会う機会を得なかった魯庵は、小説の価値に懐疑的であったのをドストエフスキー『罪と罰』を読んで「曠野に落雷に会って眼眩めき耳聾いたる如き」（内田、169）深甚な感動を受ける。そこでロシア文学に通じている四迷を思い出す。そして四迷を訪問することになるのだが、印象を次のように記している。「沈毅な容貌に釣合う錆のある声で、極めて重々しく一語一語を腹の底から搾り出すように話した。口の先で喋る

る我々はその底力のある音声を聞くと、自分の饒舌が如何にも薄ッぺらで目方がないのを恥かしく思った」(内田、171)。四迷から小説の目的は真理を発揮し人生を説明することであると聞き、小説その他の軟文学をただの一時の遊戯に過ぎないと考えていた魯庵には、「二葉亭に接して千丈の飛瀑に打たれたような感」(内田、172)を経験する。常磐津、新内、清元といった俗曲を二葉亭四迷が好むのは、「頭の隅のどこかに江戸ッ子特有の廃頹気分が潜在して、同じデカダンの産物であるこういう俗曲に共鳴」(内田、181)したからであろうし、また国士気質から俗曲と国民性とを結び付けたりもする。四迷自身の好みもあるが、「下層階級に味方する持前の平民的傾向から自然にこれらの平民的音曲に対する同感が深かったのでであろう」(内田、182)。また、四迷を山本権兵衛と比べる評について、魯庵は書いている。「気の毒なる哉二葉亭は山本伯とは全く正反対に余りに内気であった、余りに謙虚であった、かつ余りに潔癖であった。切めて山本伯の九牛一毛なりとも功名心があり、粘着力があり、利欲心があり、かつその上に今少し鉄面皮であったなら、恐らく二葉亭は二葉亭四迷だけで一生を終らなかったであろう」(内田、195)。——この魯庵の印象は、四迷の人柄を内面にまでふみ込んで伝えている。

＜3＞「文は人なり」：戯作という文体、戯作の実存

彼の人物像と文体との関係、四迷における文学の意味とはどのようなであったのか。むろん文体は性格の反映でも人格の価値を表しているのでもない。逆にしかじかの人生を送った人間ゆえのしかじかの文体、といった類推もありえない。

伍) 四迷における文体への意識はどのようなであったか。「余が言文一致の由来」(全集5、170-172)の中で四迷は、自分のような「元来の文章下手」が何とか一つ書いてみようとして坪内逍遙を訪ね助言を請いたところ、「あの円朝の落語通りに書いて見たら何うか」と言われ、いわれるままに書いてみたことを正直に記している。しかし、円朝から学んだのはその口調だけであつたろうか。落語家もまた明治維新の激動に巻き込まれ、新政府の方針、とくに明治5年「三条の教則」(敬神愛国・天理人道・皇上奉戴)による芸能界の思想統制に円朝も協力するかにように『塩原多助一代記』『英国孝子之伝』において政府の要求する「新時代の功利主義に還元できない美德を語るために」(磯田、109)海外小説の意匠を借りたりした、と見ることができる。そうした転換期の葛藤を、四迷は円朝の中にも見ていたのかもしれない。四迷の言文一致は、庶民の側に自分を置くことと共に、時代の同伴者であることの表明であろう。

また「余が翻訳の標準」(全集5、173-177)では、欧文では音読して味わえる音調が和文では単調になることを嘆いている。翻訳でも意味のみならず、文調も意識的に移そうとコンマ、ピリオドの類にも注意を配ろうとするが、しかし出来上がってみると自分の訳文は読みづらく、評価できない(同、174)。そこで四迷は「ツルゲーネフにはツルゲーネフの文体があり、トルストイにはトルストイの文体がある」(同、175)ことを確認する。「文体は其の人の詩想と密着の関係を有し、文調は各自に異なつてゐる」(同)。そしてロシアの詩人ジュコーフスキ

一のバイロン訳から学んで、部分的には原文とは韻は異にしながら意味を掴んでいて「原作に含まれたる詩想を発揮」せんとめざすことに落ち着く。そのための必須条件としてのロシア語の能力については四迷は十分であった。

時代を生きる人間の文章も、詩想を持っている人間の文章も、ともに人生や実存の表現である。それゆえ、四迷にとって文章の目的は真理の発揮であり、人生の説明であって、遊戯とはならない（内田、172）。「言語は人の意思の反映」（全集6、11）と述べ、また「文章は心の影なり 心は文章の体なり」（全集6、59）、というのが四迷の文体についての観念である。「文は人なり」を誠実に考えていたことを示す（吉田、59）と言えよう。「文は人なり」と訳される原文“Le style est l'homme même.”（Buffon）は、正確には「文体は人なり」であるが、四迷はこのことを理解していたように見える。

六）坪内逍遙と二葉亭四迷との関係は、人間的にも文学史的にもかなり密接であるが、しかし両者にある違いにも大いに注意する必要がある。逍遙の雅号は莊子に由来し、自らも「逍遙遊人」と名乗ったりして、江戸趣味を引きずったままの近代的作家・文人のようすである。「春のやおぼろ」というもう一つの筆名もしかりで、在野に徹したことや通人・粹人的な人生も、彼もまた戯作者的伝統に位置づけることが可能であろう。

二人の小説観から見ると、逍遙『小説神髓』と四迷『小説総論』の比較ができる。逍遙の場合、新たな「小説」概念提示の狙いは、それ以前の戯作的な勧善懲悪的軽薄さの打破にあった。「人情世態の模写」が小説の目的と彼は主張する。他方、四迷の場合、小説の目的は真理の表現にあった。人生や社会を批判する実践・現実志向が四迷の根底にあって、たんなる現実描写の写生文のような小説は、彼の採らないものである。経歴的には兩人とも在野の人として徹しようとするが、同じ戯作調の文人でありながら、逍遙は江戸の通人の面影を残し、四迷は政治的抵抗としての戯作の雰囲気を持っている。

『浮雲』の文体については江戸時代の戯作、三遊亭円朝の口調を模倣した四迷であるが、本文の内容については、ロシア文学から彼が学んだ社会批判や人生・運命への真摯な態度がモチーフになっている。戯作の内容が人生を茶化したり風刺・冷笑を特徴とするのに対して、ツルゲーネフやドフトエフスキーの重厚さは大きな対照を成す。それが戯作風の文体で書かれたことの逆説をどう理解したらよいのだろうか。

七）中村光夫によれば、逍遙は明治知識人の光明面を描いたのに対して、四迷はその暗黒面を主題とした。『浮雲』『其面影』『平凡』と一貫するのは「知識階級の内面的破産」（座談、71）であり、『浮雲』と『舞姫』を並べるのがよく、共に「知識階級というものの生き難さ」（同、77）が表現されている。たしかに『浮雲』の登場人物は、学問はできるが観念的で社会性の欠けた官吏の内海文三、その従妹で流行好きのお勢、学問より要領よく出世をめざす本田昇の三人が主人公であるが、文三の挫折は明治20年代の倫理の敗北を意味し、それは近代日本の＜文明開化＞の代償でもあった。作品としての『浮雲』を、「明治社会に生きる日本の知識人固有

の魂の問題」(田中、7)をテーマとして「二葉亭のいう「官尊民卑」(官僚批判)を巡る文三の描写の中に萌芽として存在し」「二葉亭のいう「新旧両思想の衝突」(＝「新思想内部での衝突」)(同、7)が描かれている、という解釈も筋が通っているが、しかしながら、フィクションとしての文三のみならず、四迷彼自身が「ヂレンマ」(進退維谷)(全集5、269)の人であったことを銘記すべきであろう。

「我が半生の懺悔」において四迷は自分の内面的葛藤の人生を反省する。その葛藤とは「維新の志士肌」と文学・芸術上の趣味人という対立であり(全集5、265)、社会主義思想に傾きながら、「儒教の感化」と「帝国主義の感化」との葛藤である(同、268)。儒教的「正直」と、『浮雲』の評価にもかかわらずぬぐいきれない「卑下」、そして「芸術尊敬」の思いの間の矛盾。すなわち、「正直」に即せば親のすねかじりから脱却するしかなく、そのためには金が必要であり、そこで売れる小説を芸術の理想に反して書くに至りながら、自分が情けなく「卑下」することになる(同、268f.)。理想的と実践的との葛藤である。また自分のロシア語能力を生かして実業家に成ろうとするが、そこで商売肌と志士肌とが混ざることになる(同、274)。そうした自己矛盾の混在を内面的に自覚する四迷であるが、もっとも、それは彼個人の個性にすべて起因するばかりでもなく、いわば時代の病でもあったのではなかろうか。

上記の「正直」をどう読むかについては研究者のあいだで論争がある。近代市民道徳的に「しょうじき」と読むべきか、あるいは儒教的士大夫の倫理としての「せいちよく」と読むべきか、と(田中、347)。読み方はともかく、意味内容的には儒教的正直、西欧の啓蒙思想的正直、武士的正直、町人的正直、日常道徳的正直など、四迷はこの概念を巡っても煩悶したのであろう(十川c、39-45)。佐藤による「正直」に相応するロシア語<Честность>との比較研究から、ツルゲーネフに見られるように、それが自分自身への正直のみならず、民衆に対する誠実も意味しているとする解釈も有意義であろう(佐藤、129-151)。我々がここでかんたんに考えるとすれば、四迷は儒教的「せいちよく」を脱却して近代市民社会の「しょうじき」や理想としての「社会主義」、現実としての「商売肌」へと自分を移行させた、と想定することも可能であろう。

そのような「ヂレンマ」(進退維谷)ゆえに、四迷の真骨頂は懷疑的精神にある。「私は懷疑派だ」における真情の吐露は彼の本音であろう。『平凡』執筆の時を振り返って曰く、「私は筆を執っても一向気乗りが為ぬ。どうもくだらなくて仕方がない」(全集5、230)、と。そのために結局「サタイア」「諷刺」になったと言う(同)。また、『其面影』では人間の性格を描くのではなく、「つまり具体的の一箇の人ぢなくて、ある一種の人が人生に対する態度」(同)を書くしかなかったという。「^{ほんと}真実の事は書ける筈がないよ。よし自分の頭には解ってゐても、それを口に^{めいめい}し文にする時にはどうしても間違つて来る、真実の事はなかなか出ない、彷彿として解るのは、各自の一生涯を見たらばその上に幾らか現はれて来るので、小説の上ぢや到底偽ッぱちより外書けん」(同、230-1)云々。彼の懷疑は、言葉や文章・小説に向けられている。また、「直接の実感」(同、231)を求めるゆえに、芸術の本態を空想に考える美学では「真剣勝負」(同、232)にならない。思想というものに対する懷疑でもある。20世紀の文明は無意味

になるのではないかと予感するのは、今日の時代が「19世紀で暴威を逞くした思索の奴隷になってゐた」(同)からであり、そこから「脱却する機会に近づいてゐるらしく見える」(同)。「つまりこびり着いて居る思想の血を払って、新たな清い生活に入ろうとする過渡の時代のやうに今を思ふ」(同)のが四迷の立場である。その認識があればこそ、「人が文学や哲学を有難がるのは余程後れてゐやせんか」(同、233)と喝破する。「今の文学者など殊に西洋の影響を受けて、いきなり文学は有難いものとして担ぎ回って居る」(同)と嘲笑する。「^{リ－ヤル、ライフ}真生活」(同、234)と関係のない思想・文学・科学を四迷は否認するのである。「私の主義は思想の為の思想でもなけりや芸術のための芸術でもなく、また科学の為の科学でもない。人生の為の思想、人生の為の芸術、将た人生の為の科学なのだ」(同、234-5)。二葉亭四迷が自らを懷疑派とするのは、彼自身の生い立ちや育った環境ゆえの個性なのか、あるいは、そうであることを余儀なくされている時代の子としてなのか。

＜結語＞時代精神としての「戯作的」

二葉亭四迷の生涯・人物像、そして作品を追ってみると、そこには、日本の西洋文明摂取に当たっての愚昧さに愛想が尽きた、明治期の自覚的知識人の良心的生き方としての「戯作的」という観念が思い浮んでくる。それは、高山樗牛の「美的生活を論ず」に結実するような反理論的態度、種々の道德説に辟易している様子、そして生と本能の称揚を生活の美学と称する極端な耽美・本能主義の思想にも通ずるだろう。しかし、実存の形式としては、漱石の「低徊」趣味に近いように思える。逍遙や四迷の生き方を「戯作的」と範疇化しながら、両者の違いを明確にすべきであることは上に述べた通りである

「戯作」とはいうまでもなく近世小説のひとつのジャンルである。しかし、そこに含意されていることから、語法の拡大が可能であろう。中西進による卓抜な論考に従えば(中西、182-190)、『宇治拾遺物語』巻3で語られているような放屁事件は恋の幻想と王朝ふう優美さに対比される世俗や肉体を見せつけている戯作である。また、戯画というものは「優美という人間の仮面を、「くるめ」く肉体のただ中において剥ぎとること、そこでは人間は一途に滑稽でしかないこと」(中西、184)を示している。また、『万葉集』以来の滑稽歌の「愚」の伝統は『とりかへばや』『提中納言物語』にも続き、落馬して冠が脱げたために禿頭を晒すことになる「をこ」は、傍から見れば戯画そのもので戯れな語りで興を添えているにすぎない。たわぶれの「狂」として、「＜戯＞という閑雅の余裕をちらつかせているように見えるが、これに狂の蒼ざめた面貌を重ねる」(同、187)のが広義の戯作の伝統であった。さて、このような文学史的解説は、改めて「戯作」「戯画」の観念を深化させてくれるだろう。それは、圧倒的な敵・支配者ないし対象に対して、あるいは時代の狂乱的変動の中にあつて、無力で抵抗力のない小さな自分を見つめさせ、自嘲や卑下をないまぜにしながらも、己の等身大を模索する実存の姿を象徴する。

こうして見てくると、二葉亭四迷における、いわば芭蕉的「輕み」のような相が透けて見えてくる。漱石の低徊趣味とも重なるところがあろう。まず、四迷の戯号が持っている、文人・

文士・小説家としての気負いのなさ。それは逍遙との違いを浮き彫りにする。第二に、彼の言文一致への意識のさりげなさ。逍遙の勧める美文的要素も排除し、深川言葉的な「いかにも下品であるが、併しポエチカル」（全集5、172）を喜び、「俗語の精神は茲に存する」（同）という信念は、自らを正統ないし権威の側に置かない態度を示している。第三に、思想や教義への懐疑。四迷は言葉や思想よりも直接の実感を尊ぶ。第四に、芭蕉的な「高悟帰俗」（「あかそうし」）の精神。漱石や魯庵の四迷評は、そのような彼の精神を示唆している。四迷は学識とロシア語能力において一級の学者であった。鷗外は四迷の翻訳を指して「翻訳がえらいといふことだ。私は別段えらいとは思はない。あれは当前だと思ふ。翻訳といふものはあんな風でなくてはならないのだ。あんな風でない翻訳といふものが随分とあるが、それが間違っているのである」（鷗外、345）と言っている。さすが、名訳『即興詩人』『ファウスト』を残した文豪の眼は確かである。そうした教養の高さと俗人の気概とのバランス（アンバランスではなく！）が四迷の実存をつくっていた。志高く、そして低く語り、風雅の心を持ちながら、そして俗な姿を厭わないのである。最後に、四迷の自己卑下の癖も挙げておこう。「私一人がいけないんだね」（全集5、231）と自嘲的に言い、また「予が半生の懺悔」では『浮雲』が世間的に評価を受けながら「私は非常に卑下してゐた。今でも無い如く、其当時も自信といふものが少しも無かった」（全集5、268）。それは彼には芸術を尊敬する気持があるからであり、「自分が文壇に立つなどは僭越至極、芸術を辱しむる所以である」（同、269）と語っている。「私の身にとると「くたばって仕舞へ！」といふ事は、今でも有意味に響く」（同）。つまり、「自分の理想からいへば、不埒な不埒な人間となって、銭を取りは取ったが、どうも自分ながら情ない、愛想の盡きた下らない人間だと熟々自覚する」（同）。そこで、「苦悶の極、自ら放った声が、くたばって仕舞へ（二葉亭四迷）！」（同）。——四迷に見る戯作調の文体はまさに彼の実存の姿であったように思えてならない。

[References]

- 全集1：『二葉亭四迷全集』第1巻、岩波書店、昭和39年
全集5：『二葉亭四迷全集』第5巻、岩波書店、昭和40年
全集6：『二葉亭四迷全集』第6巻、岩波書店、昭和40年
漱石：夏目漱石『漱石全集』第12巻、岩波書店、1994
鷗外：森鷗外『鷗外全集』第26巻、岩波書店、昭和48年
『新体詩抄（初編）』（丸屋善七版復刻版）ホルプ、昭和57年
『江戸の戯作絵本（1）初期黄表紙集』教養文庫、1980
『日本思想体系16文体』（加藤周一・前田愛校注）岩波書店、1989

安藤：安藤重和「日本における翻訳文学」『日本近代文学と西洋』（佐藤孝己・富田仁編）駿河台出版社、1984

イ・ヨンスク『「国語」という思想—近代日本の言語認識—』岩波書店、1996

石光：石光眞清『曠野の花』龍星閣、昭和44年

磯田：磯田光一「湯島天神と丸善一硯友社における江戸と西洋」坪内祐三編『明治文学遊學案内』筑摩書房、2000

内田：内田魯庵「二葉亭余談」坪内祐三編『明治文學遊學案内』筑摩書房、2000
興津要「幕末・開化期戯作者の思想と文体」『日本文学』第10巻第2号（1961年2月）
片岡：片岡良一「明治時代」『岩波講座日本文学』岩波書店、昭和6年
ケーベル：久保勉編『ケーベル博士随筆集』岩波文庫、1957
榊原美文「逍遙・二葉亭」『岩波講座日本文学史第11巻 近代』岩波書店、昭和33年
佐藤：佐藤清郎『二葉亭四迷研究』有精堂、1995
山東：山東功『明治前期日本文典の研究』和泉書院、2002
関：関良一「解説」『浮雲』旺文社文庫、昭和49年
田中邦夫『二葉亭四迷『浮雲』の成立』双文社出版、1998
坪内：坪内士行『坪内逍遙研究』早稲田大學出版部、昭和28年
十川a：十川信介『二葉亭四迷論』筑摩書房、昭和46年
十川b：十川信介「二葉亭四迷」『岩波講座 文学 7』岩波書店、1976
十川c：十川信介『二葉亭四迷一志士と文士のあいだー』（NHK文化セミナー）日本放送出版協会、1999
中西：中西進『狂の精神史』講談社文庫、昭和62年
中村光夫『二葉亭四迷論』新潮文庫、昭和34年
西木正明『間諜二葉亭四迷』講談社、1994
畑a：畑有三編『角川日本近代文学大系 4』角川書店、昭和46年
畑b：畑有三編『二葉亭四迷』（作家の自伝1）日本図書センター、1994
福田清人・小倉脩三『二葉亭四迷』清水書院、昭和41年
村山：村山吉廣『漢学者はいかに生きたかー近代日本と漢学ー』大修館書店、1999
森岡a：森岡健二『近代語の成立一文体編一』明治書院、平成3年
森岡b：森岡健二『改訂近代語の成立一語彙編一』明治書院、平成3年
座談：柳田泉・勝本清一郎・猪野謙二編『座談会明治文学史』岩波書店、昭和36年
山本：山本正秀『近代文体発生の史的研究』岩波書店、1965
吉田：吉田孝次郎「二葉亭四迷の文体」『國文学』昭和34年10月号

（原稿受理 2003年4月17日）